



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

72



2024.3

総人・人環 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

| | | |
|--------------------|-------------|----|
| 祭りはまだまだ続く | 桂山 康司..... | 2 |
| 惑いの歳月を終えて..... | 廣野 由美子..... | 4 |
| 震災・ショパン・ワンコ | 合田 昌史..... | 6 |
| 歩道～歩んできた道～より | 川本 卓男..... | 8 |
| 科学は恋する心から | 田中 真介..... | 10 |

新任の先生より

| | | |
|--------------|------------|----|
| 壊れるって素敵..... | 佐藤 公美..... | 15 |
|--------------|------------|----|

ご退任を迎えられる先生方から

祭りはまだまだ続く

桂山 康司

(人間・環境学研究科 芸術文化講座／
総合人間学部 国際文明学系)



京都大学の教壇に立つものが一番心がけるべきことは何かということが時折話題に上ることがある。そんな折、わたしがいつも言うのは、「自説を押し付けぬ」ということ

である。本人にどんなに確信があっても、どんなに見事に学生を納得させたと見えても、授業終わりに学生が何気に「そういうことなのですね」と聞き返せば、「さあ？——自分でもう一度考えてみて！」と、はぐらかすのが私流の授業の締め括り方である。所詮、人のなすこと、絶対的知は神のみに許されており、自説は仮説の域を出ない。むしろ、学問を行う際に、(自説に対して) 批判的姿勢を決して崩してはならぬという心構えを伝えること——余程、このことの方が、自説の見せかけのすばらしさの誇示より、大事というわけである。

私は、専門の英詩研究にくわえて、全学共通科目では英語を教えてきた——教養科目全体の中の「外国語教育」科目の一つとしての「英語」である。言語は、確かに、コミュニケーションの道具であり、専門の先生からは、いまや英語はグローバルな言葉で、新しい学問上の新情報はほとんどが英語でやり取りされるのであるから英語教育は

大事だと言ってもらえるのは有難いことである。一方で、それは、結果として偶然起こっていることからの評価で、残念ながら、教養教育の目指すものは何かといった理念からの評価ではない。そもそも、外国語教育の意義という観点からは、ドイツ語もフランス語もスペイン語も、英語と全く同等に評価されるべきものなのである。日本人にとって、最も大事な言葉は母語であるところの日本語である。言語はコミュニケーションの道具である前に、思考の道具である。ちょっと考え事をしますとあって、「Well, ~」と言い出して、英語で考える日本人はいない。日本人は日本語で考える。そして考えることなしに実践できる学問はない。そう考えれば、日本人が学問をする際に、如何にして母語である日本語を鍛えるかは、学問の達成に直接かかわる問題である。その鍛錬に外国語教育が有効であると言うのに、よく知られたゲーテの言葉「外国語を知らないものは、自分の国語についても何も知らない。」¹⁾ をわざわざ引き合いに出すまでもないだろう。私は、入学生を迎えて一回目の授業においては、いつも、皆にノーベル賞を取ってもらうために英語を教えているのだと大風呂敷を広げるが、外国語と格闘することを通じて思考の道具としての母語を鍛えるという観点からは、これは本音でもある。(——それにしても、教え子からノーベル賞受賞者が出ないか

1) 高橋健二編訳『ゲーテ格言集』新潮文庫、116頁。

※できれば、教養部赴任時の拙稿「祭りと私」(1991年9月発行『京大教養部報』No.197、6-7頁 京都大学吉田南総合図書館所蔵)も併せて読んでくださいね。

なあ…。) 言葉は文化の箱舟で、我々は母語の習得を通じて自国の文化、価値観も同時に身に付ける。そのまさに、当然視されている、みずからの文化に内在する既成概念に揺さぶりをかける——それが教養教育において外国語教育を荷うものの務めであると信じている。

えらく大仰な話になってしまった。それにしても、一体、いつからこんな大それたことを考えるようになったのか。こんな考えに取りつかれて、今まで全速力で駆け抜けてきたが、定年を間近に控えて、心の欲するままに生きるとしたら何を一番したいのかを問うようになり、いま、それがようやく見えてきたと思っている。その説明のためには、すこし、時間をさかのぼってもらう必要がある。

今から、もう半世紀近くも前のこと、高校の英語教員になるという夢をもって京大に進学した。たまたま、一般教養科目の英語の授業で、本格的に英詩を読むことになり、難解な言い回しを平易に説明できる英語力を身に付けることがよい教師になる道だと信じ、英詩にのめりこむ。その後、大学院に進学、教養部の教員となって夢を実現する。研究者と英語教員との葛藤に悩むこともあったが、英語を教えている自分が好きで、授業が自分の誇りであった。

その後、田地野彰先生との運命的出会いを果たし、自分は英語教師だという思いをはっきり行動に移して、同僚先輩である丹羽隆昭先生、水光雅則先生、田地野先生とともに、京都大学の英語教育改革に全力で取り組む——本当にやりがいのある、充実した毎日でした！

一応の改善策が定着したのを見届けたとき、同時に、何か、心の中にやり残したものがあることに気づいた。それまで、周りから求められるがまま、高校へ出張授業や、大学進学希望者のための企画などで、高校生を相手に授業をする機会が

あり、それがなんとも楽しいのだ。しかも、英詩研究で培った知見が、高校でも、中学でも、英語教育に直接的に貢献することが分かった時、今までの、研究と教育の板挟みから全く解放されて、その両者を共に生かす一本の道が見えたように思えてきた。

今、定年を迎え、何をしたいかって、やっぱり英語を教えたいのだ——それも、英語の楽しさ到现在まで気付いていない日本の若者に！具体的には、リズムに対する専門的知見を活かし、詩や同様のリズム上の特性を持つことわざなどを用いて、どうすれば、英語を自然な形で読むことが出来るのかを、日本語との比較においてわかりやすく提示する。さらに、「なぜ」という問いを大切にしながら、英語表現の一つ一つ、言葉の響きの一つ一つにこだわり抜いて、それを教養の涵養へと繋げる。そんな授業がしたい！——学生と向き合い、現場での授業の充実を目指すことこそが私の生きがいなのだ。

もちろん、研究は授業を充実させるために必須のものであるから並行して続行する。国際学会での発表を継続し、英詩技巧の発展を、特に、ホプキンを中心に歴史的に解明したいと考えている。

お祭り人生はまだまだこれからも続く——ソーリヤー！ チキチン、ドンドン、テケテン …

(かつらやま こうじ)



だんじり祭りでの法被服の勇姿

ご退任を迎えられる先生方から

惑いの歳月を終えて

廣野 由美子

(人間・環境学研究科 芸術文化講座/
総合人間学部 人間科学系)



論語に、「子曰く、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う」とあります。

私は子供のころには作家になりたかったのですが、まずは文学を学んでおこうと思い、研究者になることを志しました。三十代で山口大学の助教授に着任し、何とか「立つ」ことはできました。ところが、四十になって京都大学に転任してからも、五十代になっても、「惑い」は続きました。ついに定年退職間際になって、「天命」とは何たるかを考えざるをえなくなった次第です。

大学教員という職業では、研究・教育・行政という三種類の仕事が課せられます。私は正直のところ、そのうちのいずれにも、身の丈に合った居心地のよさを感じることができませんでした。強いて言うなら、独りで自由に没頭できる文学研究が、そのなかではいちばん適性に合っているのではないかと感じています。とはいえ、論文のテーマはいくらでも出てくるものの、自分が本当にやりたいことは別にあって、研究はそこへ向かうためのプロセスにすぎないというような気持ちが、心のどこかにありました。

一方、教育は私にとって、毎週毎週、授業という形で迫ってくるのっぴきならない仕事でした。授業の準備にはつねに多大な時間が取られ、いつ

も雲がかかったように心が晴れない状態で、本当の意味での休日は、これまでほとんどなかったように思います。私は授業をパフォーマンス、つまり、演奏家にとっての舞台のようなものとして捉えていましたから、本番前には緊張し、実演中はハイになり、終えたあとには消耗しきってしまうこともありました。若いころには、ごく一部の学生の授業態度に失望しただけで、不機嫌を隠しきれなくなったことも時々あり、厳しい教師だと思われていたかもしれません。年齢を重ねるにつれて、学生を観察して楽しむ余裕が生まれてきました。

行政では、立案だけではなく、会議での討論が大きなウェイトを占めているため、人の感情面の要素が影響することも、少なくありません。しかし私には、つい研究の延長線上であるかのように、自説の主張に集中してしまいがちな癖があり、あとになって、もっと相手の気持ちを汲んだ物の言い方をすればよかったと、反省することが多々ありました。

というようなわけで、自分の「天命」たるものの在り処が定まらないまま、目の前のひとつひとつの仕事に取り組むことがやっとの日々でした。しかし、定年を前にして、次第にいろいろなことの折り合いがついてきたように感じています。これまでの惑いの年月のなかで、私が細く長く持続してきことをひとつ挙げるとすれば、それは本を出版すること、つねに次なる本の構想を考えてきたことです。専門書だけではなく、一般向けの学

術書や翻訳書も出してきました。人に読んでもらうための文章を書き続けていれば、研究書だとか、一般書だとか、創作だとか、種類にこだわることはないのではないかという境地に、最後は到達するに至りました（というか、自分に納得させたと言うべきかもしれません）。「自分の仕事の軸は文学である」と思うと、気持ちがすっきりしたのです。敢えて研究・教育・行政などのカテゴリーに分類する必要もなく、文学という「軸」からぶれなければ、人の役に立つことにつながり、そこに「仕事」が成り立つのではないか、というように思い至ったのです。

*

さて、最後に皆様に「告白」しておかなければならないことを、付け加えます。それは、この24年間、総人・人環で「英語の先生」と呼ばれるたびに、私が違和感を覚えてきたということです。私は、専門領域がイギリスの小説であるという関連から、全学共通教育では英語を担当することになりましたが、もともと語学は苦手で、正直のところ、英語があまり好きではなかったからです。

専門科目で英文学を教えているときには、自分の領域について学生たちに存分に語ることができました。しかし、全学共通教育では、英語教育や言語学の専門家でもないのに「英語」を教えている自分に対して、冷やかな疑いの目で見ているもう一人の自分がどこかにいるような居心地の悪さをつねに感じていました。

しかし、逆に言えば、この違和感があったからこそ、私は全学共通教育のあり方に対して先鋭な問題意識をもってきたのかもしれません。もし自分自身が英語を教えて幸せだったなら、英語力不足に悩む学生の気持ちに共感したり、どうすれば力をつける教育ができるのかと苦心したりすることもなかったかもしれません。また、自分が配置された英語教育運営組織という砦を、部局や全学、そして社会の時流といったさまざまな波から守り抜かねばと、戦う必要もなかったかもしれません。

こうして行きがかり上、「英語」絡みで苦闘してきましたが、後半になって、全学共通教育担当教員として抱えていた問題は、個人的にはかなり解消されました。それは、国際高等教育院の設立により、英語教育改革が行われたのがきっかけです。新カリキュラムが設計され、国際高等教育院所属教員との間で科目が分担されるようになり、人環教員は、1回生用「リーディング」と2回生用「外国文献研究（E1）」の担当に専念することができるようになりました。それ以降、私は「リーディング」では教材としてエッセイを扱い、言葉はいかに表現効果をねらって用いられ、文章はいかに組み立てられているかということを学生に理解させ、読解を深める教育に主眼を置きました。

特に大きな変化を私に与えてくれたのは、「外国文献研究」の担当です。この新科目はそもそも、「英語で書かれた文献を使って、専門分野の学問を一般教育として教える」という狙いから設計されたものでした。おかげで、心置きなくイギリス小説をテキストに用いて講義することができるようになったのです。「文学とは何か」ということを、所属学部に関わりなくすべての学生に伝えることができるというのは、貴重な経験でした。これまで文学作品を読んだこともないような学生が、文学に対する新鮮な感動を、言葉や表情、態度に表すのを見るのは、喜ばしいことです。これこそ、教養教育の醍醐味であり、それは、総人・人環に所属している教員でなければ経験できない貴重な機会でした。

惑いが解けるまではねばろうと、大学教員を続けてきたおかげで、多くのことを経験し、学ぶことができました。それによって、自分の文学の仕事を深めることもできたように思います。何よりも、人との関係があってこそ、仕事と呼ぶに値することがやってこられたのだと、皆様に感謝しています。

（ひろの ゆみこ）

ご退任を迎えられる先生方から

震災・ショパン・ワンコ



私が京大での長い学生院生生活を経て、西洋史学の常勤教員として職を得たのは1988年のことです。29歳で新潟大学に公募で拾ってもらいました。着任早々、大地震が

くるかもしれないけれど、校舎はゆっくり倒れるから逃げられるよ、とブラックジョークをかまされました。「液状化」という言葉が初めて使われたのは、1964年の新潟地震だったのです。1994年に神戸の甲南大学に転勤となり、翌年1月に阪神淡路大震災で震度7を経験しました。500年に一度の規模の地震に遭遇するタイミングで移ったのです。「お前ほど運の悪い奴はいない」と言われましたが、幸いけがはありませんでした。それは新潟時代から寝室に大きな家具をおかないようにしていたからです。それでも震災のショックは大きく、数年間研究が滞りました。

人間・環境学研究科の旧・歴史文化社会論講座に着任したのは、2012年9月でした。その頃の教授会は荒れていました。国際高等教育院の開設が決まり、全学共通教育を担ってきた人環の行く末が危惧されていました。初めての講座会議で、故・川島昭夫先生が、「合田君、せっかく来てもらったけど、人環はなくなるかもしれない」と仰ったのを記憶しています。会議では笑いが広がっていましたが、私にはもやもやが残りました。このたび

合田 昌史

(人間・環境学研究科 共生世界講座/
総合人間学部 国際文明学系)

短期間で大幅な改組に成功し、人環が再出発できたことは大慶に存じます。

個人的には着任の翌年から数年間、身心を病みました。医師には休職をすすめられましたが、私は仕事を限定することで乗り切ろうと考えました。すなわち、研究と学会活動をすべて停止し、教育と学内業務に専念したのです。しかし、医師からもらった薬は効きませんでした。私が頼ったのは睡眠導入剤とショパンでした。若いころよく聴いていたモーツァルトが受けつけなくなり、ショパンが弱った心に染み入るように感じました。眠剤を飲んでアシュケナージのノクターンを聴きながら床につく。そんな生活を約3～4年間続けました。

ようやく回復を自覚し、研究を再開し始めたころ、JAXAから「宇宙大航海時代」の研究会に招聘されました。この研究会は約5年間続いたのですが、大航海時代の対外進出と現代の宇宙開発のあり方にいくつか類似点があることが確認できました。研究会の傍らで「はやぶさ2」のコントロール・ルームを瞥見する機会も得ました。様々な知的刺激をうけ、これが「文理融合」のひとつの形かもしれないと思いました。

私は家族を姫路に残し、単身赴任だったので、孤独がこたえたのか、ある時期からワンコの夢をよく見るようになりました。そこで新型コロナ禍のおともとしてブリーダーからメスの豆しばを譲ってもらいました。それ以来、一日2回のお

散歩が私のペースメーカーとなっています。退職後はお散歩の回数が増えそうです。

今私がちょっとおそれているのは、36年間続いた講義がばたりと止むことで生じる反動です。クレイジーケンバンドの唄のようなことにならないか。

♪俺の俺の俺の話を聞け！

2分だけでもいい…♪

まあ、そうなってしまったら、ワンコにお座りさせて、講義をしますか。

(ごうだ まさふみ)

ご退任を迎えられる先生方から

歩道～歩んできた道～より



46年前の年度末、私は、両側に立て看板（タテカン）がいっぱい並んだ歩道を歩いていた。歩道の先には、赤い鳥居が見えていた。歩道上では、学生や予備校関係者と思われる人たちが、なんだ

かお祭り騒ぎかのように私を迎えてくれていたが、私の気持ちは、これからのことでいっばいで一切相手にすることなく目的の場所に向かった。

目的の場所は京大工学部の入試会場だ。残念ながらというよりやっぱり、その年には合格することができなかったが、浪人生活をして晴れて京大の工学部工業化学科の学生となることができた。工業化学科は、前年、第一希望者が定員割れという前代未聞の事態をおこしていた。そのこともあってか、多くの予備校が提示している工業化学科の合格ラインは、京大工学部の中で最低ラインだったと記憶している。私は、当時、電気製品からコードをなくして通電できるようにしたいとの夢を持っていたこともあり電子工学に一番の興味を持っていたので、前年は、この工業化学科の話は関係なかったが、もう浪人生活を続けるわけにはいかないとの思いと、「金」のような価値の高いものを作り出す錬金術の流れをくむ化学も研究対象としては魅力的だとの思い、それから、なんといっても、自由の学風の京大で学びたい、そして京都で大学生活を送りたいという強いあこがれと、研究者になるなら（できたら学者になりたいと思っていた）自由の学風の京大でない一流から外れる恐れがあるとの当時の強い思い込みから、合格ラインが最高レベルに近い電子工学をあ

川本 卓男

(環境安全保健機構 放射線管理部門／
人間・環境学研究科 地球・生命環境講座)

きらめ、工業化学科を第一希望にしていた。案の定、工業化学科の倍率は跳ね上がり、京大で最高レベルの4倍以上となったが、爆上がりの倍率に臆することなく受験をし、合格発表の掲示板に、自分の受験番号を見つけることができた。それ以来ずっと、京大に何らかの形で籍がある状態で、ここまで来た。工学部工業化学科（工学研究科工業化学専攻）が最も長く、留学帰りの助手だった平成14年6月に京大の医学研究科に転任するまで20年以上お世話になった。医学研究科で、5年弱過ごし、同じ医学部キャンパス内にある放射性同位元素総合センターに教授として赴任し、その1年後の平成20年から、協力教員として人間・環境学研究科に参画させていただくこととなった。人・環の協力教員をさせていただいている期間も、すでに16年になろうとしている。

46年間脈々と続いている京大との縁の中で、1年強の間、京大から離れていた時期があった。1年強の期間だが、この期間が、私のキャリアに大きな影響を与えることになったと思う。アメリカのウイスコンシン州立大学マジソン校のトムソン研究室にてヒトES細胞に関する研究をするために留学をしたのだ(写真)。純粋に化学的な手法だけでなく、新しい物つくりの方法や新材料を生み出すのではなく、生物の力や生物由来の材料に着目していたため、ヒトES細胞という「万能細胞」が世界で初めてトムソン博士によって樹立されたと聞き、いの一番に留学させてもらった。トムソン研は、私が留学した時は、まだ小規模のラボで、留学生の受け入れも始まったところだった。その後、トムソン研は、新たな研究所を国から得て、世界的なビックラボとなり、京大の山中教授とヒトiPS

細胞の樹立競争をすることになった。この留学によって、私の研究の幅が広がったのはもちろんのこと、研究者とのつながりも幅広くなった。そして、京大で所属していた研究室のボスが定年を迎え、新たな居場所を見つける必要があった私に、医学研究科という新たな居場所をもたらしてくれた。しばらくの間、新型コロナウイルスによるパンデミックによって留学に出かけられなくなっていたが、渡航制限もほぼ無くなったので学生さんや若い先生方は是非留学すると良いと思う。

今、私の所属先は環境安全保健機構である。医学研究科から移った当初は、放射性同位元素総合センター（RIセンター）という独立した部局だった。RIセンターは、京大の共同教育研究施設としては最も古くからあり、日本のRIセンターのリーダーとして東大、阪大、東北大、名大のRIセンターとともに全国の放射線施設や放射線に関わる教職員を教育訓練していくことを文科省や規制庁から期待されているセンターであった。実際に、国立大学の法人化前までは、文科省から全国向けの研修会（全国研修）を開催することを求められており、参加者の旅費を含む開催の経費の全額が文科省から支給されていた。法人化後は文科省から直接経費が来るシステムが失われてしまったが、現在も、文科省や規制庁から全国研修の開催を期待されており、文科省や規制庁のお役人が実際に開催された全国研修に参加されたりしている。しかしながら、昨年度、京大上層部の小組織は整理して統廃合するという強い意向の元、マスコミを大いににぎわした霊長類研究所の廃止と同時期に、国際化が進行するに従って増えてきている留学生などにとっては特に大切な診療所であった健康科学センター（旧保健管理センター）の廃止とともに、RIセンターは廃止され環境安全保健機構放射線管理部門に統合された（霊長類研究所の廃止は、不正が大きなトリガーで、健康科学センターやRIセンターの統廃合とは事情は異なるが、本部組織の影響が及びにくい遠隔組織を整理したいという意向が背景にある）。このRIセン

ターという組織の廃止は、東日本大震災以降強調されている放射線に関するリテラシーの向上や安全文化の醸成といった流れ、そして、その流れを推し進めるためにも主要大学のRIセンターの拠点化が重要だとする日本学術会議の提言¹⁾にも反する形で強行されたもので、現場の我々専門家の意見をまともに聞こうとせずに押しつぶすものであった。

定年を間近に迎え雑然とした教授室から目的の場所、機構事務のある本部に行くために時計台に向かう。

途中、吉田寮の入り口付近にわずかに並んだ小さなタテカンの中にある、吉田寮の建て替えに際して京大側に、学生を裁判に訴えるのではなく学生との話し合いの席に着くことを訴えるタテカンにちらりと視線を向けつつ北上を続け、東一条の交差点から東へ入る。

そこでは、自由の学風の京大にあこがれて受験会場に向かった時とは違う小奇麗な風景の歩道が、今は、私を迎えてくれている。

(かわもと たくお)



留学した米国ウイコンシン大学マジソン校（UW-Madison）のキャンパスの一風景²⁾。

中央付近の人が集まっているところがカフェテリアのオープンテラス。左端のドーム状の建物は州議事堂。

1) 提言「大学等における非密封放射性同位元素使用施設の拠点化について」、日本学術会議、2017年9月6日

2) 海外におけるヒトES細胞研究—米国ウイコンシン大学、川本卓男、日本再生医療学会誌 再生医療、Vol.3、No. 1、P.93、2004

ご退任を迎えられる先生方から

科学は恋する心から



● 1. 自身の学生時代、地質学から生物学へ、そして人間研究へ

学生時代には地球のいろんな国の地形や地質の様子を知りたくて、自然地理学を専攻していたんです。転機としては4回

生の夏に卒業論文の指導教員にくっついてフィールドワークに行ったことですね。「南西諸島で珊瑚礁の調査をするから来ないか」と誘って下さって。海に潜れるんだと思っていたら、山に登って行くんです。「山の上にもサンゴはあるんやで」と言われて。離水珊瑚礁と言って、昔は山の上が海水準だった時代があって、その山腹の地層のラインにサンゴの化石が残ってるわけです。その化石の年代を測定することによって、昔の海の面が今と比べてどれくらい高かったか、海水準が時代とともにどう変化したかを明らかにすることができます。海面の高さというのは地球の気候の変化を反映していますから、そのような昔の環境と地殻変動、例えば地震の発生の仕組みとの関係を調べることができるわけです。

地形学と地震学の分野の研究チームの共同調査の旅だったんですけど、生物を調べるともっと面白いことが分かるんだということを教えられて、そのへんから生物の進化に近づいていくことになりました。それが一つのきっかけで大学院に行って、人間がなぜ二足歩行をして言葉を話すようになったのかということをテーマとして研究することになったんです。

一方では教師を目指していたということがあります。熱を出して寝込んでいた時にラジオから青年海外協力隊の隊員募集の話が聞こえてきて、「こ

田中 真介

(国際高等教育院 保健体育教室)

人間・環境学研究科 認知・行動・健康科学講座)

れだ」って。発展途上国では教師が不足しているんですよ。隊員になるための試験に落ちたり、合格したものの派遣先の受け入れ態勢が整っていなかったりで結局行けずに終わりましたが、教師になるための勉強が足りないと感じて、それが大学院に行くもう一つの理由になりました。

学生時代、私は、知識を持っている大人が、子どもにその知識を授けるのが教育だというふうにならずに思っていたんです。そういう面は確かにあります。けど、京大の教育学部の発達の研究室に来た時、子どもたちがどうやって大人になっていくかという発達の見方そのものが、すごく違くなっていうふうに思いましたね。知識をだんだん蓄えていくだけが、人間が能力を身につけるやり方、過程ではないんだと。それを非常に面白く感じました。特に障害を持った子どもたちの発達と療育の方法について、養護学校や障害のある方たちの施設での療育指導の実践の成果をもとに、世界に類例を見ない発達理論が構想されていて驚きました。

● 2. 発達とは。京大での発達研究

動物の赤ん坊の多くは生まれると数十分で立って歩き始めます。それに比べると人間の乳児は、生まれたあと6カ月以上にわたって仰向けやうつ伏せの姿勢で過ごしますね。いわば無力で発達が遅いんです。人間の子どもの発達が遅い、個体として生き残る上では無力であるってということには大事な意味があるんじゃないか。

チンパンジーの赤ちゃんを抱っこしてミルクを飲ませていると、人間の赤ん坊と違うなあと感じることがあります。ミルクを飲んでいて間こちらの、私の顔を見ることはほとんどないんですね。他の哺乳動物も同じです。それに対して人間の赤

ん坊は、おなかが空いてミルクをどんどん飲み始めていても途中で必ず休憩して、飲むのをやめて、じっとこちらの目を見つめてくれます。ミルクは生きるために不可欠ですよ。でも人間の赤ちゃんは、命を守るための栄養摂取をいったんやめてまでも、まわりにいる他の人たちと気持ちを通わせ、社会的な関係を結ぼうとしているといえそうです。

見る力だけではなくて、手や体の動きでさえも人間はそれを社会的な関係の表現としています。例えば、1歳児がスプーンを使えるようになるときに、決定的に重要なのは他者の存在、もうひとり誰かが近くにいることです。あなたは1歳の時、最初はその人にスプーンで食べ物を口に運んでもらった。そのあと、あなたはその目の前にいる人に微笑みかけた。たとえ大学生になった今、ひとりの部屋の中で自分の手を動かしてご飯を食べているとしても、あなたはそのような社会的な環境の豊かさの中で食べる喜びを感じとり、喜びを感じとる力を蓄え、それを表現し、その交流の中でスプーンを使ってご飯を食べるという人間的な動きを身につけてきた。一人では生きていけないという弱さ、すぐに一人立ちはできないという発達の遅さのゆえにです。

その後、2歳代には、かみついたり叩いたり髪を引っ張ったりして、第一反抗期とも言われる時期を迎えたことでしょう。親が「パンツはきなさい」って言っても「イヤッ!」と拒否してパンツを放り投げたりする。でも「パンツはかへーん」って言ってた子をよく見て、その子が何がイヤで反抗しているのかをよく確かめてみる必要があります。そして条件をちょっと変えてみます。青いパンツと赤いパンツの二つを出して「どっちをはく?」と訊くと、あれだけ反抗していた子が、例えば青いパンツを取ったりするんです。そうになると、さっきの行動は青いパンツを拒否したんじゃないで、「これをはきなさい」と一方的に言われて自分で選択する余地の無い状況を押つけられることを否定したのではないかということがわかります。自分で選んで自分で決める力がついた。そういうふうには自我が確立し大きくなっている段階が2歳児だということを教えてください。

大事な価値ある選択肢があって自主決定を促されて、「自分が～する」というふうには、自ら行動を選び取って、子どもという発達の主体が何をどう

したいのかを自分から表現できると、反抗したり拒否したりする必要がなくなる。社会的な諸関係を変え、その子の自我を尊重することで、反抗的と見える行動も姿を変える。それが発達の大事な仕組みだと思うんです。

乳児期に何か心に傷を受けたことが反抗行動として現れるというわけではなくて、もし親や周りの社会の方が2歳児を乳児や1歳児のように扱って、「これをはきなさい」という形で、一方的に指示を与えてそれを受動的に受けとめさせるような関係に置いていると、2歳児たちは反抗せざるを得ないのではないかと。そのような関わり方をずっと続けていけば続けているほど、子どもたちは問題行動をしっかりと打ち出してきて、「自分はそういう形で力を発揮したくないんだ」というサインとして、発達への要求として拒否をしたり暴れたりするのではないかと。問題行動というのはそういう意味を持っていると思います。小学校での学業不振、思春期の反抗や暴力、さらには大人の犯罪行動や反社会的な行動と言われるような行動においても同様ではないでしょうか。仕事があり、その中で自分の力が十分に発揮でき、きちんと評価されているか。さらに力を伸ばすための研修の機会是有給で保障されているか。地域の中で協力しあって生活をよくする活動に参加できるよう援助されているか。そのような社会環境の整備によって犯罪から遠ざかることのできる人たちがたくさんいるはずなんです。

罰によって一時的にその行動を統制できたように見えても、その反抗のエネルギーは抑圧されるだけで温存され、いつか形を変えて表現されるでしょう。また、社会的条件に問題点が残っているあいだは時を変え人を変えて問題行動が再発することになりますね。ですから、問題行動がもっている意味を明らかにして、単に個人を罰するだけではなく社会の側の諸条件を改善していく必要があるように思います。

● 3. 京大の気風とされる「自由」の意味とは「専門的な研究は、能力を失わせる」

自閉症を示す子どもたちは2歳か3歳になってもなかなか言葉が出ない子が少なくありません。リンゴの絵が描かれたカードを見せても、リンゴと言えない。それで、言葉の力をつけて、人と会

話できるようにしようと、特に欧米の自閉症研究では、例えばコンピューターの画面にリンゴの絵が表示されて「アップル」って音声が出て、その子どもが「アップル」って言ったらか何か報酬がもらえる、そういう行動改善プログラムがさかんに行われてきました。いろいろとバリエーションはあるわけですが、基本は、絵カードに対して音声表現するという言語表出の「結果」をもとにして、その結果の行動そのものの反復訓練を言語習得プログラムとしているわけですね。人間の発達には、全身運動や手の操作や言葉とか認知、あるいは社会性——いろいろな人と関わる力というように様々な面がありますが、言葉の力の領域を見て、その力が抑えられているからそこを改善しようとするわけです。

言葉だけが特に遅れているのがはっきりするので、そこにサポートを入れる。それはいいんですけど、カードの絵を見てそれをアップルと発声する。結果としてそういうふう言葉の力が表現されるとしても、言葉をそういうふうに見ただけだと、例えば、いつも発声練習している絵カードに対してはアップルって言うけど、本物のリンゴを見ても何も言えなかつたりするわけですね。ましてや色が違ったり半分に切ってあったりすると全然分からない。絵カードと音声のマッチングの練習をした結果がそうなりやすいんです。

そこで、通常の2～3歳の子どもたちがどうやってリンゴと言えるようになるかを改めて考えると、お母さんと一緒にリンゴをかじったときの甘酸っぱい味や歯触りとか、互いに見つめあって、おいしいねといった表情をしたこと、あるいはリンゴの木に登って実を取ったってというような経験もあわせて、リンゴという概念ができて関連するのであって、味や感じとか、リンゴに関わる経験、そういうのが全部合わさって「アップル」という発声になってるわけですね。だから絵カードを見てアップルと言うよりずっといろんな広がりがある。そしてさらに、その概念は成長していく。

そういう豊かな経験を抜かして、リンゴの絵カードに対して「アップル」と発声する練習をすることは、むしろ言葉の発達を抑えるのではないのでしょうか。特定の絵カードに対して子どもは「アップル」といわば名づけてしまい、広く多様なリンゴに対して「アップル」と言えるような力は逆に抑えられるんじゃないかな。それに、リンゴ

に関連してとても豊かなリンゴ体験が想起されて、それが他の言葉の力に波及していくはずですが、一対一対応のマッチング練習ではそのような発声のもとになる力、それらがすべて捨象されてしまっています。

さらに、実際には、リンゴの絵を見てアップルって言うだけでは終わらないはずですね。2歳の子どもたちは、リンゴを指差しながらお母さんの方に視線を向けて「アップル」って言ったり。お母さんも「ああアップルやね」と応えてくれる。そのようなつながりの豊かさの中で、その言葉がアップルという音声記号として人類に共通に大事にされているということがその子の心に滲みわたっていく。ですから、絶対にもう1人人間が必要なんですね。伝える相手がすぐ側にいることが必要わけです。さらに、その特定の人との間だけでなく他の別の人との間でも同じ音声コードが普遍的に通用するということが経験される必要があります。それなしにコンピューターと自分だけの間で会話練習をすると、コンピューターに対して発声するだけの練習になってしまう。それは言葉本来の機能を失う練習をしていることになると思うんです。

一つの分野の専門的な学習、結果として得られる知識の習得だけを反復学習することや、特定の能力の発揮だけを促されるというのは、その能力を発揮させている、能力の中身を失っていることになると思うんです。すごく極端に言うと、専門的な研究というのは能力を失うことだと思います。その専門的な力がどういうふうにも他の分野と関連しているかというのを考えて研究しないといけないんじゃないかな。

自分がやっていることの社会的な本当の意味とか、広がり、他の諸分野との連関が分かる。それが分かった上でそれを自己表現として生かすようにして、自分の身につけるかたちで勉強できるといいんじゃないかなと思うんです。そういう意味で、限定した、形式的な力の発揮の仕方とか勉強の仕方はしないほうがいいんじゃないか。形だけの勉強をするとむしろ、力の内実が失われるんじゃないかなと思います。

その具体的な例を挙げることができます。大学のスポーツ実習で、「はい、ボール使ってウォームアップ」と言うと、教員がやり方の手本を示すまでみんな黙って待っている。同じことをしないと

いけないと思っているのでしょうか。ウォーミングアップは体を暖めて主運動の準備ができればいい、という本質がわかっているならば、その方法は自由にできると思うんだけど、これまであんまりいい加減さが許されない雰囲気であつたのかなあと。自由の学府と言われる京大なのにな。中学校や高校時代、先生が言うことをきちっと学ぶ方向だけで過ごして来たのかなと、ちょっと心配しています。もっと、何が大事かを読み取って、何を自由にできるかを感じとって自由にやったほうがいいんじゃないかな。

自由っていうのは、ぱらぱらっといい加減にできるっていうのはちょっと違うと思うんです。大事なことがしっかり分かれば、何をどんなやり方でやってもいい。違うやり方、多様なやり方が分かって実践できるということだと思います。それが失われてきているのが気になります。みんなと同じ答えを要求される試験においてさえ、自分独自の答案を書き上げ、問題そのものさえ変えるような自由度の高さ青さを思い出してほしい気がします。

とくに大学入学共通テスト（以前のセンター試験）では、ほとんどが選択肢の中から必ず1個の正解を選ばなければいけない問題構造になっていますが、「問い」や「認識」の本質を見誤っていると思いました。問題の方を変えて答えを新たに発見する力や、自分で世界を限定・拡張したり、自分独自の世界を新たに表現し創造するのが認識の力なのに。人間の認識の力のありようを評価し、援助の方法を考えるためではなく、一斉に試験をしてきちっと得点の序列をつけ、人間を大学にふるい分けることを目的としているので、このような試験問題の構造をとることになっています。

もちろんいい問題がいっぱいあるので特定の力は計れると思うのですが、そのための勉強をすると、必ずこの中に答えはあるはずだという発想でいくし、パターンを習得することばかりが得意になって、問題を作ったり変えたりする力、社会の中で何が重要な問題なのかを発見するような力は培われないのではないのでしょうか。形式的な勉強をして、参考書と同じ答えをしたら力がついたと思ひ込んだり、教師と同じことをしないと許されなと思ひ込む。もっと問題そのものを考えるような、そういう方向の勉強をやっていいんじゃないかなと思います。

● 4. 自己の価値の感受と認識、自己観の変化と対象世界のとらえ方の変化

「学ぶとは、自分の魅力を新しく見つけ出すこと」

4～6歳の子どもたちに「自分の赤ちゃんのとき、今、そして大人になったときの自分の姿を描いてね」と言って描いてもらいます。「成長画」といいます。4～5歳では自分の赤ちゃんの時を、基本的に「体の大きさが小さい」存在と捉えます。「大人の自分」は「体が大きくなる」「背が高くなる」。つまり、自分の発達的な変化を、体の量的な変化だけで認識していることがわかります。しかし、5歳後半から6歳代に入ると、赤ちゃんの時を「ねてる」姿勢や「よつばい」の姿勢に表現したりします。大人の自分については、制服を着て学校に行く様子、ハイヒールを履く、髪を長く伸ばした自分を描くなどです。さらに、今の自分が持っていないオシャレなハンドバックを描いたりします。未来への願いを表現するわけです。幼時から今を経て将来に向けての質的な変化を捉え、そのときどきの独自の特質を認識しそれらを反映した自画像を描いてくれます。

4歳児は、ある事象の時間的な変化をまずこのように量的な指標を用いて、それも大小といった対の両極の尺度で対象を把握する傾向が強い。ですから、彼らがもし歴史を記述するとしたら、過去から現在そして現在から未来への人類社会の発展史を、まずは例えば工業生産力の大小だけで認識することになるだろうと思います。それに対して6歳児は、古代や中世の人々の、神との距離を測るような独特の世界観を示したり、また、世界の経済発展の質的な変化をとらえる目をもつことができそうです。

ここで重要なのは、4歳から6歳にかけて「過去の見方」そのものが変化発展することです。

もしこのように時間的な変化の認識それ自体が変化発展する、という発達の法則性が大人の認知発達過程においても同様に貫かれているとしますと、大人もまた、自分の発達的な変化それ自体の見方を質的に変化発展させていくと言えます。自分自身がどのように変わってきたか。それはどんな経験によるものなのか。その自己評価が未来に向けて、未来の自分をどう作るかを規定していくのではないのでしょうか。

自分の発達について学ぶことによって、また、

「自分」の発達だけでなく、他者そして人間に共通する発達のしくみを知ることによって、将来の自分をどう作っていくかという見通しや将来展望そのものが新たに変わっていきます。そしてさらに、例えば自分の魅力を新たに発見するような経験を通じて自己の発達認識を深めれば、それによって自分のまわりの対象世界についての認識の仕方もまた質的に変わっていくでしょう。学業不振の打開の鍵は、その子が自分を価値づけられるような経験をする事です。

自己の発達のな変化についての認識の発展が制約されている間は、自己を多面的に評価することが難しく、また、対象の空間的・構造的性質を深く知ることが困難です。逆に、対象の性質を知る営み（例えば諸科学の研究活動や学校で多様な分野の教育を受けること）によって、私たちは自分自身についての認識内容を変化発展させる重要な契機を得ていることになるでしょう。学ぶことの意味は、対象についての知識を得ることにとどまらず、自分や世界の新たな価値を発見していく力になると感じています。

● 5. 自己信頼性と社会的交流性の大切さ、自分の価値を評価する力

「価値認識と科学的認識の発達関連」

恋人とか、すごく好きになった人がいると、その人の視点から自分を見ますよね。6歳で初めて横顔が描けるようになる。自分の顔の真横のあたりに視点を置けるということはすなわち、その視点を相手の側に置いて考えられるようになることでもあります。

研究者でも、自分自身の見方が豊かになっていくことによって、物理的な空間とか時間とか宇宙の捉え方が変わってくると思うんです。自分をどう見るか、自分の魅力を発見する力と、物理的な空間や時間の認識もつながるんじゃないかな。今私たちが、時間や空間がこういうふうになっていると思っているのは、自分自身の時間的な変化や周りの空間からの自分の見え方をこのようにイメージしているからこそだと思います。自分の魅力を発見するような何かがあって、世界の見方も変わるんじゃないかなと思うんです。

1歳の子どもたちが積木を積み、道具を使えるようになる時は、新聞を取ってきてと頼まれると

パタパタ歩いて取りに行ってくれます。誰かの役に立つことがうれしく、いろんなお手伝いができる、その子自身が価値あるものとして自分を意識でき始める時期です。そのときに物を価値あるものとして道具に変え、音声を価値あるものと認識して普遍的な言葉に変えていきます。青年期においても、勉強ができるようになるにも、その本人自身がとても大事な価値あるものとしてきちんと評価されるというのが中心として必要じゃないかなと思います。

価値意識が抜けると、時間的な変化の法則をとらえる力も制約を受けるのではないのでしょうか。自分はだんだん大きくなった、こんなふうな力もついたら、と自己認識し、自分の価値づけができるときに、変化の法則性をとらえる力がつくからです。それは多分、大学生や大学の研究者でも共通していて、自分が価値ある存在として評価されて、社会の中で生かされる、いきいきと生きるということが科学的な認識を新たにしていくことになると思います。そのためにも自分にとって大切な人をもっともっと好きになって、その大事な人の視点で自分を見たり、あるいは自分から相手を好きになる、そして相手にとっての大事な自分になる。私たちが世界を認識したり新たに作っていったときに、そのようにして人間がもっている根源的な価値をしっかりと認めあい、互いに互いを大切にしよう社会的な交流が必要なんじゃないかなと思います。

(たなか しんすけ)

〔註〕

・本稿は、次の記事と論稿をもとに新たに書き下ろしました。

- ①田中真介・守道三恵（編集）「科学は恋する心から」京大大学生協同組合「らいふすてーじ」新入生歓迎特別号、2002.
- ②田中真介「生きることの意味」日本応用心理学会編「応用心理学事典」丸善、2007.
- ③田中真介「発達と応用心理学」日本応用心理学会編「応用心理学ハンドブック」福村出版、2022.

新任の先生より

壊れるって素敵



2022年9月に着任しました。京都大学文学部、文学研究科の出身で、西洋史学を専攻しました。イタリア留学時は勉学の傍ら日本語講師や日本人学校の現地採用教員として働きつつ、最後の方ではミラノ大学大学院で中

世史学のドクターコースを修了しました。その後、前務校の甲南大学に迎えていただいて10年間で神戸で過ごし、今に至ります。とはいえ、始めからそのような道程を思い描いていた訳ではなく、一度は研究職に就くという夢を諦めかけたこともあり。そんなことを、どうしても研究への思いを手放せなかった当時の感覚とともに思い返してみると、今生きてここに居るのは奇跡だと改めて思います。それと同時に、日々を紛れて過去を振り返ることをいつの間にか忘れ、支えて下さった方々への感謝の表現もままならない自分に気づきます。思わず自分を叱責したくなりますが、まずはあるある小話^{バルゼッレッタ}に仕立ててイタリア語で笑い飛ばし、すべてはそれからにしましょう。

専門はヨーロッパ中世史、特にイタリア中世政治社会史、政治文化史ですが、私の中心的なテーマは歴史の中のコミュニティです。つまりは人と人、そして人以外も含めた諸々の存在が、歴史という、時空間に制限され矛盾に満ちた現実の中で、それでも「ともに生きるかたち」です。出発点は中世ミラノの都市コムネの研究でした。それから大都市や有力国家の君主権力としぶとく対峙し自己主張する農村や山間地域の群小の共同体、個性的な形をした人間集団、特に「ゲルフとギベリン」として知られる党派へと関心を展開させてきました。あくまで顔の見える小さな集団の自治と自立が、内部で閉じずに開かれてゆくときに生まれる連携、同盟、協働、緊張、対立、抗争、和

佐藤 公美

(人間・環境学研究科 共生世界講座/
総合人間学部 国際文明学系)

解の繰り返しの中から、歴史の中の大きな社会(例えば「国家」や「国際」社会)の展開を追求しようというのが昔からの私の研究です。上から計画され統制されたものよりも、自生的に立ち上がってくるものに関心が向きます。そうこうするうちに山野河海を越え、アルプス山脈を越えてスイスやオーストリアへ、アペニン山脈を越えてアドリア海、中部イタリアの教会国家、南イタリアへと研究対象は広がってきました。山径をゆけばいつしか青い海、という感じです。

京都大学に着任してからは「古巣に戻ってどうですか」と人に言われることもあります。人・環は私にとってまったく新しい世界です。同じ棟にいても教員同士がなかなか出会わない、しかも着任と同時に講座再編がありまったく仕組みが分からない…という不思議な環境にははじめはえらく戸惑いましたが、しばらく経って気づきました。当たり前だ、出会おうとしなくても出会える方がおかしいのだ、と。そして新しいということは、無限の余白があるということ。そう思うと、わけの分からなさ自体が俄然面白くなってきました。着任後わずかの月日の間にも、人・環の先生方の研究・教育力と情熱、縛られないフレキシビリティ、そしてエスプリを絶妙のブレンドで体现するそれぞれに個性的な諸相に触れ、また総人生・人環生の型にはまらず突き抜けた(そういう点でどこか懐かしくほっとする)予想を裏切る姿に接する度、ここに場所を与えていただいた自分の幸運を噛み締めました。願わくばその幸運に値する自分に脱皮し、自分の予想を裏切り続けたいと思うこのごろですが、そんな発想自体がここでなければ得られなかったのかもしれない。壊れるって素敵なことだ、というこの感覚が、キャンパスで出会う学び手たちの誰かに共有され、いつかどこかでその人の力になったら嬉しい、と夢想しています。

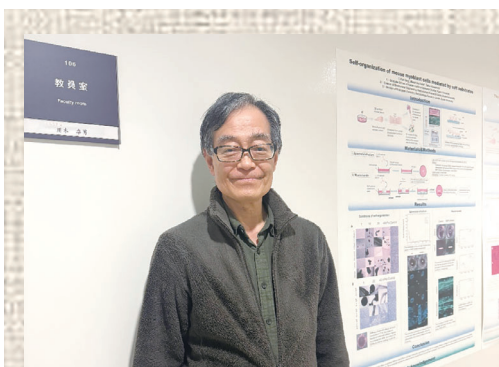
(さとう ひとみ)

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第72号をお届けいたします。
今号では、この3月末をもって退職される5名の先生方、および新任（2022年9月着任）の佐藤公美先生から御挨拶を頂戴しました。人環が改組されてから1年が経ち、この4月からは総合人間学部も改組されて、いよいよ学部と大学院がこれまでよりも一層シーム

レスに接続することになります。当学部・大学院の母胎となった旧・第三高等学校や旧・教養部からの歴史的個性が、「学術越境」というコンセプトにみごとに結実したと思います。その長い歴史と伝統に関わってこられたすべての方々の魂が、この場所にはひゅうひゅうと渦巻いている。わたしは歩いていると、そのひゅうひゅうを感じることができるのです。
(O. K.)



NHK Eテレ「100分de名著 シャーロック・ホームズ・スペシャル」
第2回より（2023年9月放送）



ホブキンス賞授賞式
(詩人デズモンド・イーガン氏とともに)



インドにおけるポルトガルの勝利を記念した16世紀のタペストリー（部分）
凱旋の様子（像・投石機・ピエロのダンス）などが描かれている



総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会